

漁況海況予報調査

I 調査目的

この事業は、沿岸沖合漁業に関する漁況海況の調査研究および資源研究の結果にもとづいて予報を作成するとともに、漁況海況情報を迅速に収集・処理することにより漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営の安定に役立てることを目的とする。

II 調査内容

1. 調査期間 昭和51年4月1日～52年3月31日
2. 調査場所 全県沿岸・沖合海域
3. 調査船 試験船幸洋丸・東奥丸・瑞鷗丸・青鵬丸
4. 担当者 主任研究員 赤羽光秋
主任研究員 沢田兼造
技師 田村真通
技師 高梨勝美
臨時 松尾 広

5. 調査項目

- (1) 太平洋沖合定線観測
- (2) 日本海沿岸定線観測
- (3) スルメイカ漁場一斉調査
- (4) サンマ漁場一斉調査
- (5) 沿岸・沖合漁況調査
- (6) 漁海況情報事業に係る標本漁船調査

III 調査方法

(1) 太平洋沖合定線及び日本海沿岸定線観測

第1図に示したとおり、日本海の14定点太平洋の26定点において、各層測温・塩検、海気象観測及び生物採集（魚卵・稚仔・プランクトン採集）を実施した。

各層の深度は、0、10、20、30、50、75、100、150、200、300、400、500 m（日本海は400 mまで）とした。

(2) スルメイカ漁場一斉調査

第2図に示した定点において、日本海（瑞鷗丸）5月1回、太平洋（6月瑞鷗丸、9月幸洋丸）2回の計3回、漁場観測とスルメイカ及び他のイカ類分布調査を実施した。

(3) サンマ漁場一斉調査

第3図に示した海域において、東奥丸・幸洋丸の2隻により漁場観測と流し網2反使用によるサンマ分布調査を実施した。この調査は同海域で実施したイカ類分布調査と同時に実施したものである。

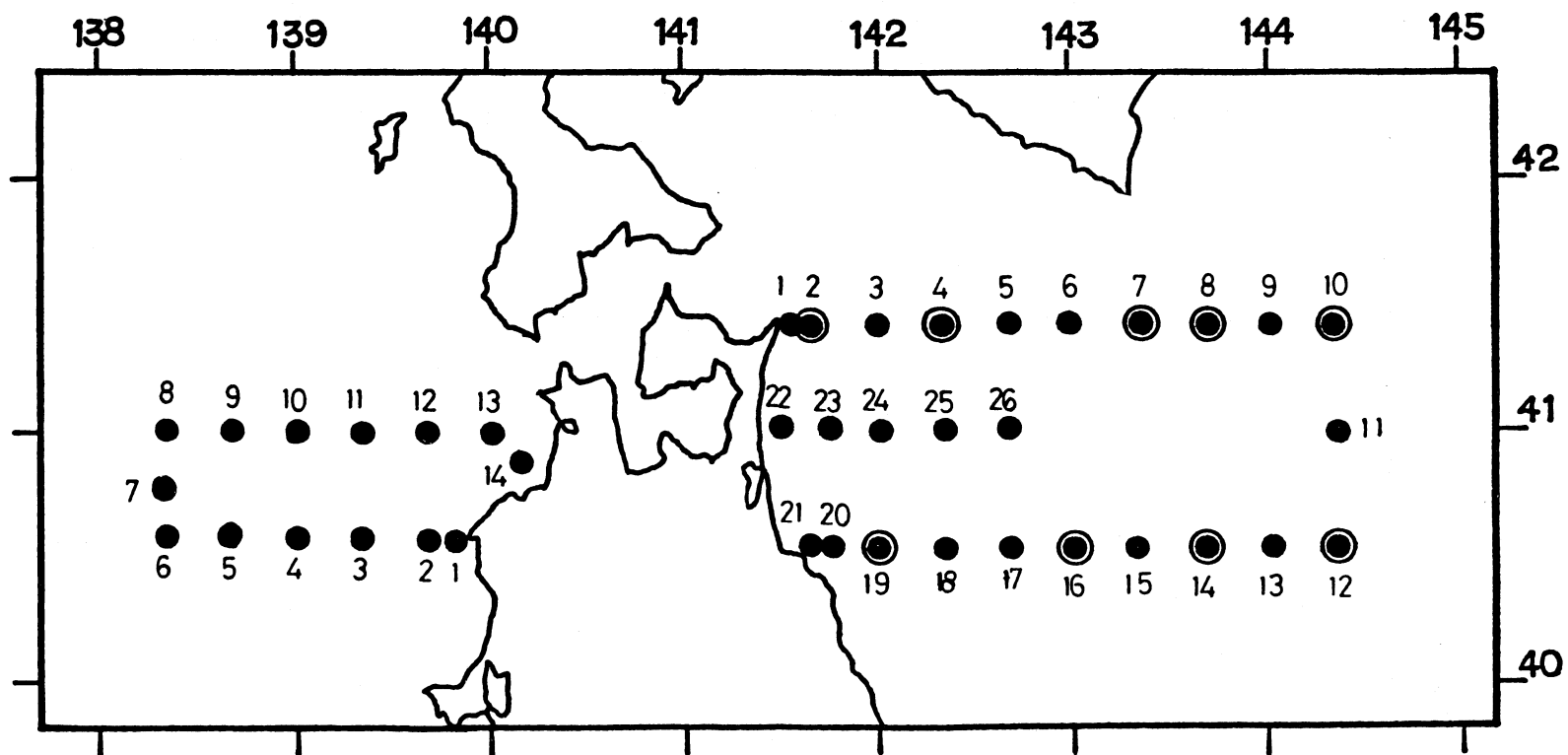
(4) 漁況調査

県内主要 9 港より，9 魚種について毎月 1 回入港船隻数・漁獲量・漁場位置・魚体の大きさ等を調査し，毎月 1 回発行する漁海況月報として漁況のとりまとめを行なった。

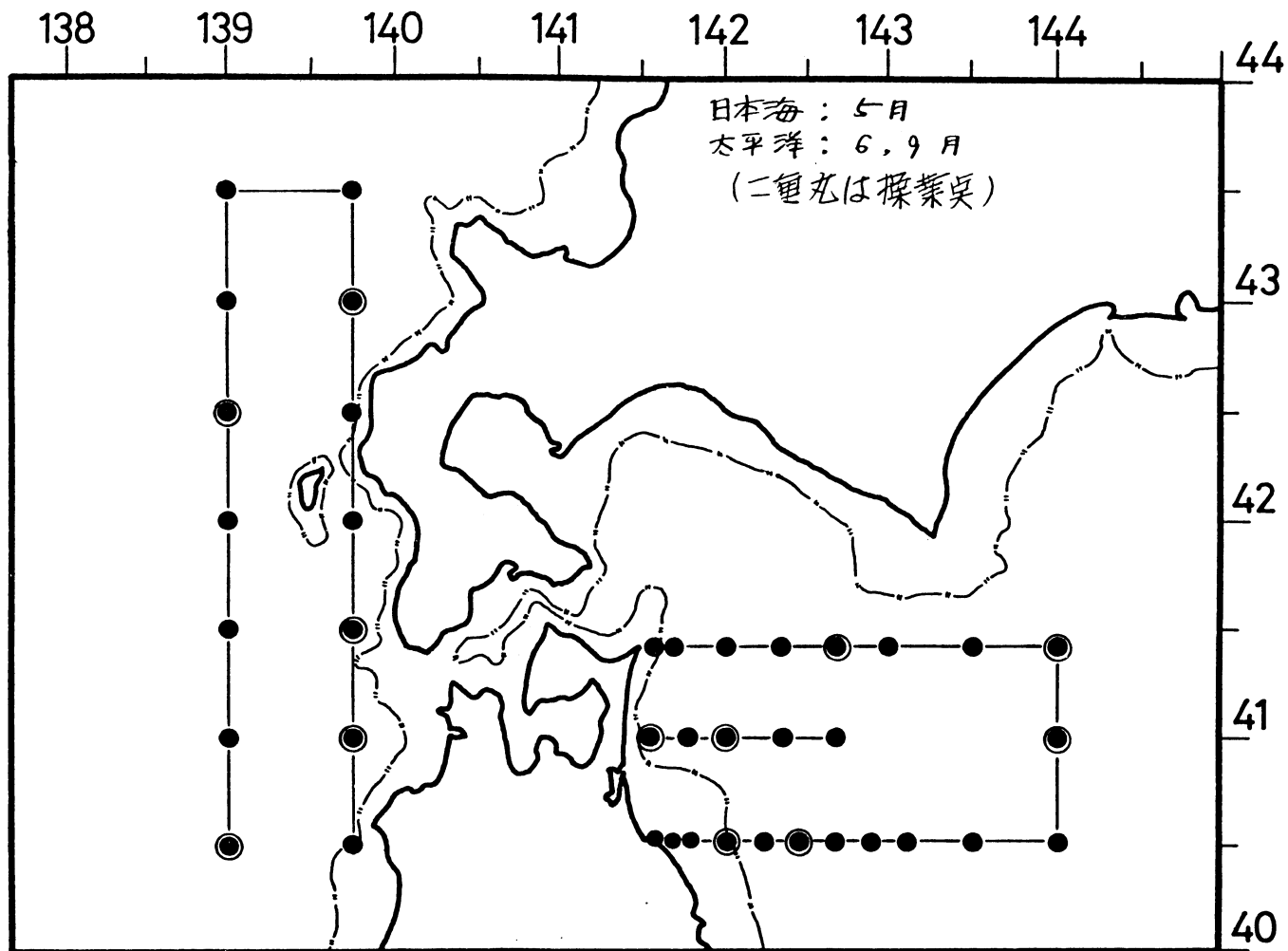
(5) 漁海況情報事業に係る標本漁船調査

日本海漁海況情報事業試験実施（社団法人漁業情報サービスセンター事業）に係る標本漁船調査を 5～7 月に 45 日間実施した。

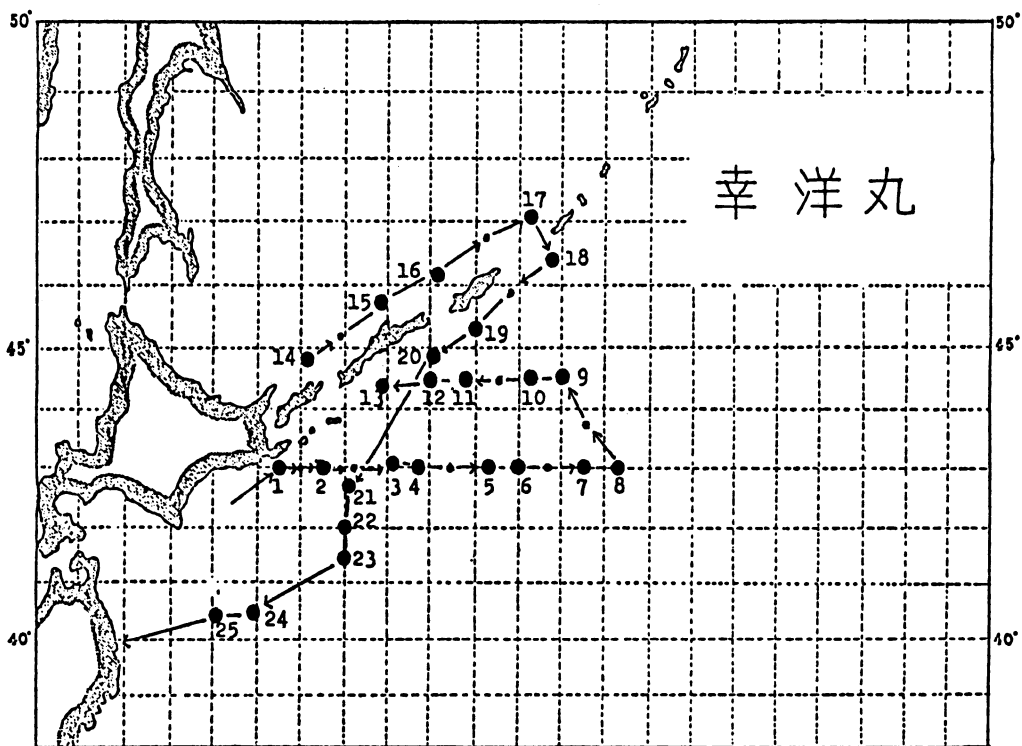
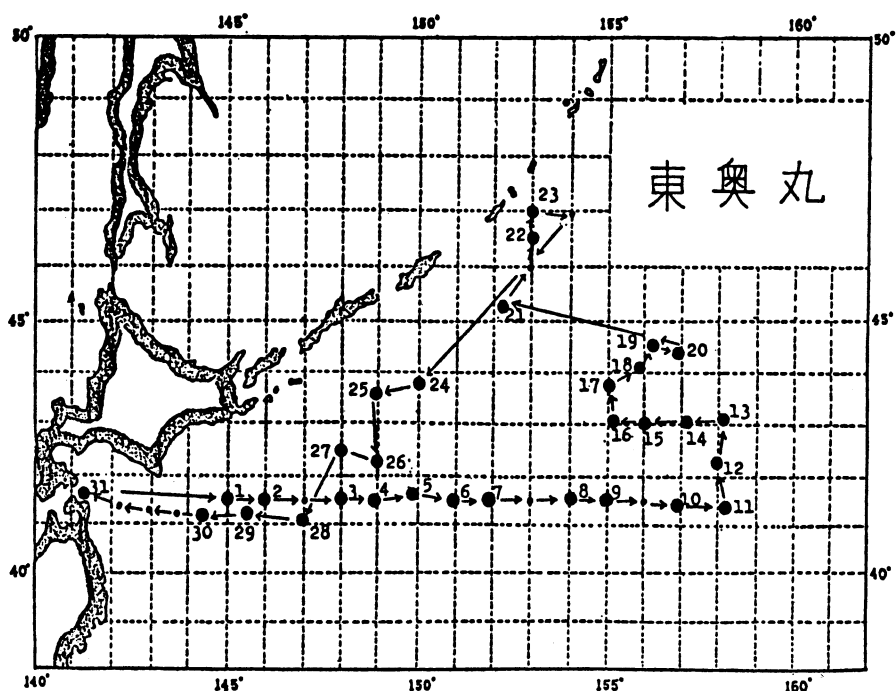
日本海マス，スルメイカ当業船より 17 隻を選定し，これらから鱈ヶ沢漁業用海岸局を經由して水温情報延 491 件を収集し，漁業情報サービスセンターに 17 回テレックス送信した。



第1図 観測定線概要図



第2図 スルメイカ漁場一斉調査定線概要図



第3図 サンマ漁場一斉調査航跡図

Ⅳ 調査結果

1. 海況の推移と特徴

(1) 日本海

1976年の対馬暖流水温は年間を通じて低めに推移し、暖流水塊の厚さ及び流量計算値も平年より小さく、対馬暖流勢力は弱かった。沖合冷水の接岸状態は、3～7月の期間ほぼ平年並だったが、8～10月は平年よりも強い接岸を示し、11月には離岸傾向を示した。

(2) 太平洋

津軽暖流の水温は7～9月の夏季に低めを示したほかはほぼ平年並に推移し、尻矢埼沖の東方への張出しは3～6月平年よりもやや狭く、7～9月はほぼ平年並となり、10月には平年よりもやや広がった。但し8月の津軽暖流南下流量を計算で求めたところ、平年（41～50年）をかなり下回っていた。

一方、青森県沖の親潮は全期間を通じて近年では最も強勢に推移したが、6月一時的に沖合へやや後退した直後の7月には再び大規模に伸展して、この間に生じた海況の急変は過去に類のない特異的現象として注目される。

また、近海（ $143^{\circ} \sim 144^{\circ} \text{E}$ ）を北上する黒潮分派は、北上位置が例年よりも60㎞ほど南偏しており、7月以降のこの水域の北限は岩手県沖（ 40.2°N ）で止まっていた。

2. 漁況の推移と特徴

(1) 日本海沿岸

日本海の家況が対馬暖流の弱勢で異常低温に近い状態だったことを反映して、夏季暖流の北上と共に始まるスルメイカ・サバ・ブリ等の初漁が例年になく遅れた。

沿岸スルメイカ釣漁業は10日ほど遅れて5月21日から始まり、年間4,978トン漁獲され、昨年及び過去5ケ年平均値を上回った。漁場が例年よりも沖合に拡大し、出漁隻数が著しく多かった等が特徴である。

大型定置網漁業では、マイワシ（15トン）及びマサバ（96トン）が近年の最高漁獲量を示したほかは、ブリ・マアジが大不漁で、マダイも不漁であった。

(2) 津軽海峡沿岸

津軽海峡のスルメイカ釣漁業も例年より10日ほど遅れて6月下旬から始まり、漁獲量は2,781トンで過去5ケ年平均（7,773トン）の僅か36%にとどまる大不漁であった。

(3) 太平洋沿岸

沿岸スルメイカは例年より2旬ほど遅れて7月上旬から水揚げされ、年間僅か528トンで5ケ年平均値（8,362トン）の約6%程度である。この海域主要資源であるスルメイカ冬生まれ系統群が近年極端に低迷しているとは云え、漁況は空前の大凶漁であった。

一方、八戸近海旋網漁業ではマイワシが好漁で10,576トン水揚げされ、反面サバが不漁で5ケ年平均の約半分（109,271トン）であった。

(4) 沖合

八戸港・大畑港に水揚げされたアカイカ漁獲量は34,484トンで、49年（999トン）及び50年（19,515トン）を大巾に超えて、当業船のアカイカに対する依存と生産意欲を端的に表わすと同時に、太平洋スルメイカ資源低迷による様相の変化を物語っている。

一方、日本海沖合水域からのスルメイカ漁獲量は、全県合わせて47,572トンで、豊漁だった昨年(58,537トン)を下回ったものの、過去5ヶ年平均(43,419トン)を若干上回わりやや好漁であった。

太平洋サンマ棒受網漁業で漁獲され、八戸港に水揚げされたサンマの量は1,189トンで、過去5ヶ年平均(5,175トン)の約20%どまりで、47年及び49年並の低い水準だった。